

おすとらだむす

DOJIN  
R18  
成人向け  
18歳未満の  
購入・閲覧禁止



チンチンを小さくする魔法

広大な森の奥深くの道を、旅の一行は慎重に進んでいた。

勇者ヒンメル死後、長い時を生きてきたエルフの魔法使い、フリーレン。彼女の弟子である魔法使いのフェルン。そして、新たに加わった戦士、アレン。

アレンは数ヶ月前、フリーレンの一行に加わったばかりだった。

魔王討伐の英雄譚に憧れ、冒険の旅に身を投じた彼だが、最近の出来事で心に影を落としていた。



それは、ある村での出来事。

フリーレンが冗談半分でかけた

「服が透けて見える魔法」のせいだ。あの時、  
フェルンはアレンの下半身を一瞥し、  
冷ややかな声で言った。

「……チンチンが、ちっさいですね。」

その言葉が、アレンのプライドを深く傷つけた。

以来、彼は密かに悩み続けていた。

ついに耐えきれなくなったアレンは、

フリーレンに相談した。

森の星空の下、彼は恥ずかしげに口を開いた。

「フリーレンさん、お願いがあるんです。」

……僕の、あそこを、大きくする魔法って、  
ありませんか?」

フリーレンは一瞬、目を丸くした後、くすくすと笑った。

「ふふ、そんなことで悩んでたの？ 古い魔法書に、そんな魔法があったはず、ちよつと待ってて。」  
彼女は古びた本を広げ、指を走らせた。  
眩くような詠唱が響き、淡い青い光が  
アレンの下半身を包む。アレンは期待に胸を  
膨らませたが、フリーレンの表情が次第に曇る。

「あれ？ なんか変……。これ、大きく  
するんじゃないかと、小さくする呪いだっただかも…。」

「えっ!？」

アレンが慌てて確認すると、

確かに彼のものは以前より小さく、  
縮こまっていた。それだけではない。  
体に熱いものが込み上げてくる。

心臓が激しく鼓動し、下腹部に甘い疼きが広がる。  
発情の波が、次々と襲ってきた。

性欲が異常なまでに増強され、頭の中が  
エロティックな妄想で埋め尽くされる。


さらに、奇妙な感覚——屈辱的な快楽を求める、  
マゾヒスティックな衝動が芽生えていた。

「ごめんね、アレン。間違えちゃった。  
でも、面白い効果がいっぱいについてるみたいだね。  
発情したり、性欲が強くなったり、  
マゾっぽくなくなったり……」  
フリーレンは悪びれもせずと言った。

アレンは顔を赤らめ、必死に抗議した。  
「こんなの、冗談じゃないですよ！  
旅の途中で、こんな状態じゃ……」



フリーレンは首を傾げ、考え込んだ。  
「そんなこと言ってももう仕方ないでしょ、  
追加で射精禁止と勃起禁止の魔法をかけておくよ。  
次の街に着くまで我慢してね〜。  
街についてから、解除してあげるから。」



アレンは絶望した。魔法の効果で、  
すでに体は熱く疼いているのだ、  
勃起すら許されない。射精など、夢のまた夢。  
溜まりに溜まった欲求が、体内で渦巻くだけだ。

一行は旅を再開した。

森を抜け、平原を横切り、次の街までとはあと数日。

フェルンはいつものように、

ゆったりとしたローブを纏い、

彼女の豊かな胸が、歩きたびに柔らかかく揺れる。

アレンの視線は、否応なしにそこに引き寄せられる。


魔法のせいで、想像が膨らみ、

フェルンのおっぱいを探みしだく妄想が

頭を支配する。体が熱くなり、息が荒くなるが、

勃起禁止の呪いがそれを抑え込み、

代わりに甘い苦痛が広がる。



さらに、フリーレンの足が目に留まる。  
草を踏むたびに優雅に動く。  
エルフランスらしい美しい脚線美に、  
アレンは欲情を抑えきれなかった。

魔法のマゾ効果が働き、  
フリーレンの足で踏みつけられる妄想が浮かぶ。  
辱められる悦びが、胸を締めつける。  
「フリーレンさん、僕を……踏んでください……。」  
そんな馬鹿げた思いがよぎり、  
アレンは慌てて頭を振った。

旅は続く。街に着くまで、  
数日の地獄のような我慢。  
アレンの体は、呪いの玩具と化していた。  
フリーレンは無邪気に笑い、  
フェルンは気づかぬふりをする。  
そしてようやく街に着くのだった……

アレンは宿のドアが閉まった瞬間、  
膝から崩れ落ち、  
フリーレンの足元に額を擦りつけた。  
土下座の姿勢で、震える声で懇願する。  
「フリーレン様……お願いします……  
勃起したいです……解除してください……♡  
射精させてください……もう限界なんです……♡」  
フリーレンはベッドの縁に腰掛け、  
長い銀髪を指で梳きながら、アレンを見下ろした。  
表情は穏やかだが、瞳の奥に  
悪戯っぽい光が宿っている。

「ふーん……本当に辛そうだね。顔、真っ赤だし、  
息も荒いし……」


彼女は足を組み替え、アレンの顎を軽くつまんで  
顔を上げさせた。

「それじゃあ、全裸になっておちんちん見せてもらん。  
ちゃんと確認しないと、

解除してあげられないから」

アレンは躊躇しながらも、魔法の呪縛に逆らえず、  
震える手で服を脱ぎ始めた。

ついに晒された下半身は、魔法でさらに小さく  
縮こまったまま、哀れに震えていた。



「ふふ……本当に小さくなっちゃったね。  
こんなにちっちゃくて可愛いのに、  
金玉はこんなにパンパンで苦しそう……♡  
溜まりすぎて、破裂しちゃうそう」  
「フリーレン様……笑ってはダメですよ……  
ふふ……♡」

辱められる言葉が、魔法のマゾ効果を刺激し、  
脳を溶かすように快楽を注ぎ込む。



フリーレンとラエルンはくすくすと笑いを漏らす。

「ふふ……じゃあ、まずは私が手でしてあげようか。」  
彼女は細く白い指を伸ばし、股間にそっと触れた。

「んっ……はあ……」

フリーレン様の指……  
気持ちいい……」

根元から亀頭までを  
丁寧に往復させる。  
指の腹が力りの段差を捉え、  
軽く引っかけるように  
して刺激する。

「フェルン、こういうのはね、緩急が  
大事なんだよ。」

ぐちゃ

ぐちゃ



勢いよく飛び、フリーレンの手首にまで達するほどの大量の白濁が噴き出す。止まらないほどの連続射精。

魔法で溜め込まれた数日分の精液が、根こそぎ搾り取られるように、次から次へと飛び散る。フリーレンは手を緩めず、射精の波が弱まるまで容赦なく扱き続け、残りの一滴まで絞り取る。

「ふふ……すっぴい量。」

まだ出てる……ほら、もっと搾ってあげてよ」

彼女は射精が終わった後も、敏感になったチンポをゆっくりと扱き続け、余韻の痙攣を楽しみながら、最後の精液を指の間から垂れ流させる。

んんん

んんん

んんん

フリーレンはアレンが床に突っ伏して  
荒い息を吐いているのを、

淡々とした目で見下ろした。

「ふふ……まだ満足してないみたいだね。

搾ったばかりなのに、

おちんちんがまだビクビクしてる。

めんどうだから、次は足でこてあげよ」

片方の細く白い素足をゆっくると股間に伸ばした。

滑らかで冷たい足の裏が、

肉棒に軽く触れる。

「ほら、仰向けになつて。

自分で足を広げて、

おちんちんを私の足に差し出さな」

フリーレンは足の裏を肉棒に

ぴったりと押し当て、

ゆっくると上下に擦り始めた。

足の指でカリを軽く挟み、

足裏全体で包み込むように扱く。

ぐちゃ

ぐちゃ

「ほら、感じてるんでしょ？  
私の足で扱かれて……」

小さくなつた情けないチンポが、  
足の裏に擦られてビクビクしてる」

速度を徐々に上げ、  
足の裏で激しく擦り上げる。  
足の指が先端を摘まむように動き、  
尿道口を軽く押す。  
腰が勝手に跳ね、甘い喘ぎが漏れる。

「ひいひいっ……！」

また……また出る……！」

「ちゅちゅ」

「ちゅちゅ」

次の瞬間、体が激しく震え、  
チンチンから白濁が勢いよく噴き出す。

びゅるっ、びゅるっ、足に飛び散り、  
床に滴る。顔を胸に埋めたまま痙攣し、  
息も絶え絶えに呻く。

「あひいいいいんっ♡」

「うわあ……本当に足で射精する  
んですね……」

「男はみんな本能的にマゾだからね。」

「ちゅちゅ」

「びゅん、  
びゅん」

「ちゅちゅ」

「びゅん、  
びゅん」

「ふふ、まだまだまだ射精できそうだけど  
ちよっと休憩しようか、

ペットで横になって休んでいいよ。

私とフエルンで買い出しに行つといっておあげるから。」  
そういうと二人は部屋を出て行った…

連続で大量射精したので

少し疲れていた

俺はペットで横になり目を閉じた…

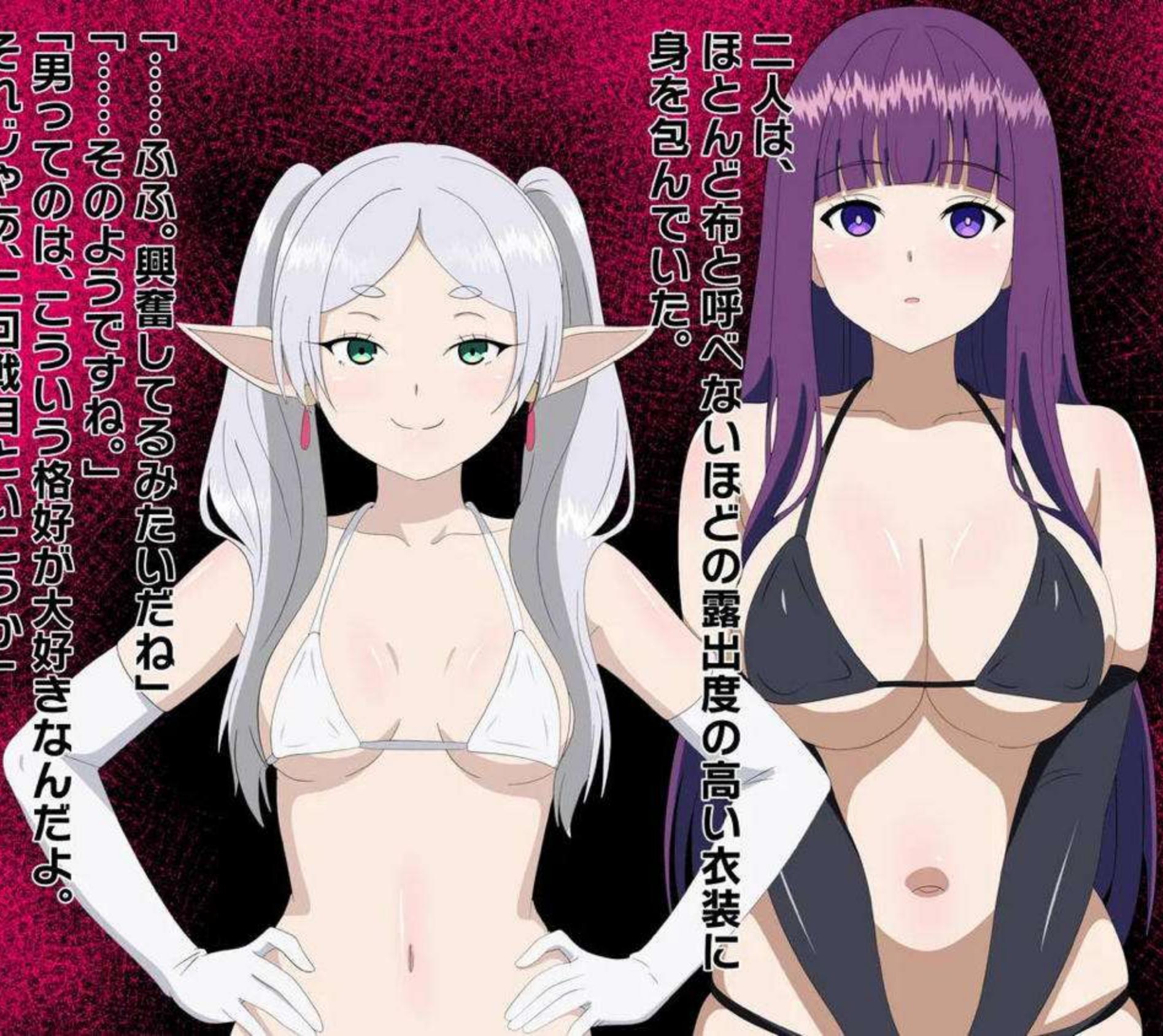
「アレ、帰ったよ、起きて。」

いつものまにか寝てしまったようだ。

視界に飛び込んできたのは、予想外の光景だった。  
フリーレンとフェルンが、  
ベッドの両側に立っている。

二人は、  
ほとんど布と呼べないほどの露出度の高い衣装に  
身を包んでいた。

「……ふふ。興奮してるみたいだね」  
「……そのようですね。」  
「男つてのは、こういう格好が大好きなんだよ。  
それじゃあ、一回戦目といいこうか」



「フェルン、おっぱい揉ませてあげて」

「分かりました。

ほら……アレクさん。

私の胸を……好きに揉んでいいですよ。」

おっぱい

震える両手をフェルンの胸に伸ばした。

掌に収まりきらないほどの柔らかさと重み。

指が沈み込むような弾力に、思わず息を飲む。

おっぱい  
おっぱい

「っ……フェルンの……」

おっぱい……柔らかい……♡」

「ふふ…興奮しているね…」

次はおっぱいで顔を挟んであげるといいますよ。」

フェルンは軽くため息をつきながらも、アレンの顔のすぐ近くに移動した。豊満で重たげな白く柔らかい乳房が、たゆんと揺れた。

「……フリーレン様の言う通りですね。」

アレンさん、顔を上げて」

フェルンは両手で自分の大きなおっぱいを下から持ち上げ、顔に近づけた。

「ほら……私の胸で、顔を挟んであげますよ。  
ちゃんと深く埋めて、息が苦しくなるくらい……  
フェルンは両乳をアレンの顔に強く押しつけた。  
むぎゆうっ……！柔らかく重い乳房が、

顔を左右から完全に包み込む。  
おっぱいの谷間に鼻と口が深く埋まり、  
視界が真っ暗になる。甘い体臭と、  
わずかに汗ばんだ肌の匂いが鼻腔を満たし、  
息をするたびに柔肉が顔に密着して波打つ。

「んっ……んっ……んっ……♡……んっ……んっ……んっ……  
アレンの声が乳房に伝わって聞こえてくる。

「ふふ……もうフェルンのおっぱいの虜だね……  
それじゃあ、パイズリでとどめをさしてあげて」  
フェルンはアレンの顔からゆっくりと胸を離し、  
冷やかな目で彼を見下ろした。

アレンの顔は赤く火照り、よだれと  
涙でぐちゃぐちゃになっていた。

ふちゅっ

「アレンさん、  
パイズリでたっぷりマゾ射精  
させてあげます。」

フェルンはアレンの体を少し起こし、  
ベッドに背をもたれさせるように座らせた。  
そして自分の豊満な乳房を両手で持ち上げ、  
アレンの情けなく振り返った肉棒の前に近づける。

ふわっ

ふわっ

「ほら……ちゃんと見ていてください。

私の胸で、あなたの惨めなおちんちんを挟んで……

最後まで搾ってあげますから」

むにゅっ……。

フェルンの柔らかかく重い乳房が、肉棒を左右から優しく、しかししっかりと包み込んだ。

温かく弾力のある乳肉が、射精を繰り返して敏感になったチンポを隙間なく覆い、根元から亀頭までを完全に埋没させる。

ふんふん

「チンチン、完全に見えなくなっちゃったね」



アレンの小さくなつたチンチンが  
フェルンの乳房の間で激しく痙攣し、  
自濁の精液がフェルンの胸の谷間から  
勢いよく飛び出し、  
乳房の上にべっとりと飛び散り汚して行く。

フェルンはパイズリを緩めず、  
射精の波が収まるまで乳房で肉棒を優しく、  
しかししっかりと包み込んだまま搾り続ける。



フリーレンはアレンがベッドにもたれかかって  
荒い息を繰り返しているのを見て、  
淡々と微笑んだ。

「ふふ……それじゃあ、次はセックスしようか」

「分かりました、フリーレン様」

フェルンはベッドに上がり、

ユウの腰を跨いだ。彼女は自分の秘部に指を当て  
すでに少し濡れているのを確認すると、  
冷たい目でユウを見下ろした。

フェルンは手でアレンの肉棒を軽く握り、  
自分の濡れた入り口に先端を押し当てた。  
そして、ゆっくりと腰を沈めていく。  
ぬぷっ……ずぶっ……ずぶっ……

フェルンの膣内は熱く、きつく締まる。  
豊かな体に似合わず狭い内部が、  
チンポを根元まで飲み込み、膣壁が肉棒全体を  
強く締め付けた。



アレンの腰がガクガクと激しく痙攣し、へこへここと無秩序に突き上がる動きがさらに滑稽になった。

フェルンのきつい膣内で、小さくなった肉棒が限界を超えてビクビクと大きく脈打つ。

パ  
ン

「もうためですぅ……♡イクイクイク……♡」

アレンは体を弓なりに反らし、口を半開きにしたまま、涙とよだれを垂らしながら連続で射精を続けていた。

「あやういっ……♡」

ぱんぱん

びん

びん

「うわ、もう射精したんですけど……  
早すぎますよ……」

「童貞だからね、」

ハハハ

「どっしっ？初めてのセックス、  
気持ちよかった？」

アハハ

「腰回って……♡ちほ……ちほ……♡」

ギョギョ

ギョギョ



ギョギョ

フリーレンはフェルンがアレンからぬいぐるみと腰を上げ、白濁の精液を垂らしているのを見て、淡々と立ち上がった。

「ふふ……次は私の番ね。」

童貞卒業したばかりなのに、まだ足りないみたいだし……「ちゃんと搾り取ってあげるよ」

ぱんっ

自分の細い指で秘部を軽く広げ、すでに少し濡れた入り口をまだ硬い肉棒に当てがった。

「ほら……入れてあげる。」

小さくなったおちんちんを、

私の膣で最後まで搾りとってあげる？」

ずぶっ……ぬるっ……ずぶっ……

ぱんっ♡



細い腰がリズミカルに動き、アレンの肉棒を膣内で何度も出し入れする。膣壁が肉棒を優しく包み込みながら強く締め付ける。

ぱんっ……ぱんっ……ぱんっ……

ぱんっ

「♡……すすすす♡EENEEENEE」

ぱんっ  
ぱんっ  
ぱんっ

わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん

ぱんっ  
ぱんっ  
ぱんっ

「ぶぶ…おっおっおっおっ…」

「きもちいいいっ…♡」

彼女は騎乗位のまま、膣壁を波打つように蠢かせ、肉棒をさらに強く締め付ける。射精の最中も容赦なく肉棒を刺激し、一滴残らず搾り取るように膣肉を収縮させる。

「まだまだ射精できるでしょ？」

夜は長いから……どんどん射精していいよ」

「うっうっ…最高だあ…♡」

「きもちいいい……まるで夢みたいだ…。」

「うん、淫夢を見せる魔法は成功してるみたいだね。」

「フリーレン様の魔術書集めもひととおりは役に立ちますね。」

「ふふ、さつき魔道具店で買った、

男性用自慰アイテムも役に立ってるね。」

「まあ、直接触らないで済むからいいですけど、これいつまで私が動かさないといけないんですか？」

「さつきは私がやったんだから、今度はフェルンの番だよ」

「元はフリーレン様のせいなのト…」

「解説したら、チンチンを小さくする魔法の解除方法は

どんどん溜まっていくマゾ精液をセックスで空にさせること、だってわかったんだけど、

こんなチンチンとセックスしたい女性はいないからね」

「だからこんなおもちゃとセックスさせてるってことですか？」

「かわいいそうだけど、脳さえ騙せればいい  
みたいだから、セックスする夢を見させながら、  
精液搾り取れば、いいってことだね。」

「でもアレンさん、  
きつと私たちとセックス  
する夢見てますよきつと、  
気持ち悪いです。」

「うーん…なんか変な空気になりそうだし、  
彼とはこの街で別れようか…。」

「そりゃあきつと。」

きつと

きつと

きつと

きつと  
きつと

呪いが解除されたことを確認したフリーレンと  
フェルンは彼に手紙を残してこの街を先に  
去っていった・・・

アレンは幸せな夢から覚め、  
精液まみれの魔道具を不審に思いながら  
手紙を読み・・・

呪いの後遺症で結局元より小さくなった  
チンチンを震わせながら・・・

真実を知り、甘勃起するのだった・・・